

砂漠を越えて

イーシャ・サーデサイによる再話

その旅人たちの隊商は、ペルシャのとある砂漠にいました。彼らの周りは砂の海で、砂紋が半永久的に刻まれていました。その砂紋は次々と、互いを追い掛けるように薄暮の空へと寄せていました。

その隊のリーダーは商人で、絹や高級じゅうたんの売り手でした。彼は商品をきちんと荷台にたたんでラクダの背中に縛り付け、そして数人の奉公人と一緒に、遠くのもっともかかる市場への旅に出ることに決めたのです。日中は野営テントを張り、焼け付く太陽の熱を避けて休みます。夜になると星に従って旅をするのでした。

彼らは今、旅の最後の区間にいました。出発する前に雇った案内人の男は、朝までに市場に着くと明言しました。「ただ私についてきてください」と、男は一団の先頭からそう言いました。「あつという間に着きますから」

周囲の空は徐々に暗くなり、ほの暗い青紫色から深い藍色に変わりつつありました。案内人は上を凝視しました。ここ、砂漠では、彼はすべての星が見えると感じていました。惑星も、銀河——地平線から噴き出すきらめく宇宙の渦——も、彼は見ることができました。

「ああ」と、彼は満足そうにため息をつきました。「夢の中にいるようだ」。荷台は優しく前後に揺れていました。大気にはわずかな風があり、涼やかに彼の顔に当たりました。「もしかしたら」と、彼は考えました。「目を休ませてもいいかもしれない、ほんの少しだけ…」

「おい！ おい！ 起きろ！ もう朝だ！」

「うーん？」と、案内人は戸惑って言いました。「ええ？」

彼は目を細めて上体を起こしました。太陽は目がくらむような明るさでした。彼がいまだぼんやりした頭で振り向くと、商人が近くに立っていました。商人は心配そうな表情で案内人を見ていきました。

「おい」と、商人は言いました。「市場はどこだ？ 俺たちはどこにいるんだ？」

案内人ははつとして辺りを見回しました。左は砂漠でした。右は砂漠でした。前、後ろ、回りはすべて——砂漠でした。

彼はぽかんと口を開けて、商人に向き直りました。

「本当にすみません」と、彼はささやきました。「私…私は分かりません。星が再び現れるまで分かりません」

その時には隊の他の者たちも集まっていました。案内人の言葉を聞いて、皆はつと息をのみました。

「どうすればいいんだ？」と、一人が悲痛な声で言いました。

「何でこんなことになるんだ？」と、喉にせり上がる怒りで別の一人が言いました。

彼らが口々に言い募る中、商人はそばに黙って立っていました。彼は唇をかみました。もちろん、彼の心も参っていました。もちろん、彼も心配し、混乱し、そして怒っていました。

けれども大部分は、彼は考えていました。その日に目的地に到着することを当てにしていたので、水がほとんど尽きかけていました。彼は解決策を見つけ出す必要がありました。しかも急いで。

商人は、周りの一面赤銅色の砂漠を見渡しました。あちこちに幾つかの岩が散らばっていました。遠くにぼんやりと緑の何か——茂みのようなものを見つけました。

突然、彼ははたと気づきました。

「おい——おい、みんな！」と、彼は言いました。皆は文句を言うのをやめました。

「来い、俺について来い、すぐに！」と、商人は言いました。「それと荷台に積んだシャベルを持って来い」

彼らは言われた通りにし、砂漠を横切って彼について行きました。間もなく、彼らは茂みが育っている場所に着きました。

それは、かなり大きな植物でした。数メートルにわたって広がり、脇の葉の間から顔をのぞかせているのは小さな赤い花でした。それはバラでした。

「分かるか？」と、彼は意気揚々として言いました。「もしも、このバラがここで育っているなら、それはこの近くに水があるということに違いない。さあ、シャベルをよこすんだ。そして自分の分も取れ。探し当てるまで掘り起こすのだ」

そこで、彼らは掘りました。掘っては、またさらに掘りました。けれども、シャベルでどんなに地面の奥深くまで行っても、どんなにたくさんの砂を運び出しても、見えるのは、さらなる砂ばかりでした。

一人が重苦しい息をしながら、とうとう言いました。「ダメです。もう何時間も掘っているけれど、ここに水はないです」

商人は、シャベルの動きを止めて見上げました。彼は額を拭いました。「もしも植物があるなら」と、彼は断固として言いました。「そこには水があるはずだ。ただ続けるんだ。やっていることを、ただやり続けるのだ」

男は疑わしそうに見えましたが、とはいえる自分の仕事に戻りました。すると何と、それからすぐに——ガチ！ ガチ！ ガチ！ 彼のシャベルが何か硬い物に当たったのです。

「何でこんな音がするんだろう？」と、男は不思議に思って声を上げました。彼は砂を脇に払いのけ始めました。他の者たちが上から見ていると、やがて、大きな岩が見えてきました。

これを見ると、男は砂の上に身を投げ出しました。

「もうどうすればいいんだ？」と、彼はうめき声を上げました。「今までやってきたことが水の泡だ！」

「どういう意味だ？」と、商人は尋ねました。「俺たちはやり続けるんだ、もちろん」

「でも、岩です！」その男は信じられないというように言いました。

「だからといって、どうしてやめなければいけないんだ？」と、商人は聞きました。

男はあぜんとしました。「どうやって岩を打ち砕こうというのですか？」と、彼は尋ねました。「こんなシャベルなんかじゃ全く歯が立ちません」

「違う道具があるだろう」と、商人は言いました。「皆で行って、荷からハンマーを持って来るんだ」

そこで、皆はハンマーを取りに走りました。彼らが戻ってくると、商人は言いました。「さあ、おまえたちの力を使うんだ。すべてのエネルギーと、意志の力を使え。この岩を打ち砕くんだ」

男たちはハンマーを握り、頭上に高く振り上げました。一斉に、彼らはハンマーを岩に振り下ろしました。

「ガツン！」と、つんざくのような音がしました。もう一度、彼らはハンマーを頭上に振り上げると、振り下ろしました。「ガツン！」

すると間もなく、岩にジグザグのひび割れができました。そしてすぐに、水がポツポツと、裂け目からこぼれ出てきました。商人も奉公人たちも、ウォーッと歓声を上げました。もうすぐでした。終わりが見えてきました！ 今までよりもっと強く、ハンマーを振り下ろしました。そして——

最後の巧みなハンマーの一撃で、最後の金属が鉱物にぶち当たる雷鳴のような響きと共に、岩が崩れました。真っ二つに割れたのです。上に上に、水が噴き上りました。閉じ込められていた水圧が、とうとう放たれたのです。

「そうだ」。水が空に噴き上がるのを見ながら、商人は思いました。

「そうだ」。そのしぶきが彼の上で描く弧を目で追いながら、彼は思いました。これは太陽の光を浴びて輝く水晶のようだと。

「俺たちの喉の渇きは癒される」と、彼は思いました。「そして、すぐに——すぐに——俺たちは砂漠を越えられるだろう」



© 2019 SYDA Foundation®.著作権所有。

この物語は、ブッダ神のさまざまな化身についての寓話(ぐうわ)や逸話をまとめた『ジャータカ』の物語の一つに触発されたものです。